

## 編集室

## 点滴について

開業してから、困ることが一つあった。点滴をどうするか。脱水が明らかな場合など、医学的に理由のある点滴は問題ない。「調子が悪いので…点滴はだめですか」と求められる、あれだ。なかには「ピシャーっと治るやつ、一本!」とかいって、栄養ドリンクと同列に考えている方もいる。大病院の専門外来では、あまりお目にかからないかもしれないが、内科で、しかも父から引き継いだ古い患者さんが多いと、このように事例にこと欠かない。結局、このような「点滴」を頼まれた場合には、基本、断らないことにした。あくまでも医学的、医療行政的に問題が生じない範囲においてはああるが。なんだか、そういうと、怪しい医者みたいで、あるいは営利主義だろ、なんて言われそうであるが、だからこそ、ここでカミングアウトしてひかえめに提起してみる。「点滴」くんにも、ちょっとはいいところがあるよ。と。

なぜ、人々は点滴が好きか。それは点滴をしたら、なんでも良くなる、というイメージ(迷信か)が一般の人々のなかに深く定着しているのだろう。家で寝とけば治る。と言われるより、ずっと「治療」されている感じがする。少しは痛いくらいがちょうどいい。しかし、そのような民間療法的考えに、医者には拒絶反応を起こす。これはまあ当然の反応だ。科学的な医学の啓蒙、迷信の排除こそは、医者への社会的使命であるからだ。大学病院や基幹病院でそんな民間治療が横行するのは恐ろしい。

ところが、われわれの現場は、「病気」の治療でなく、「症状」の治療が必要な人の割合が多いのだ。「病気」と「症状」は結構、ズレている。実際問題、点滴で満足する人はかなり多い。

まあ、まさにこれこそプラセボ効果だが。特に、神経症系の人、内科医が下手に安定剤をもてあそぶよりは健全な効果が得られるような気がする。ひとつには、患者さんが持っているストーリー、つまり「こうすれば治るんじゃないか」みたいなのを否定しないほうがうまくいくのかもしれない。

「体温は普段35度なので、36度でも熱があると思う」「風呂にはいると風邪が悪くなる」などなど、わが日本において一般の人々がもっている病気と治療についてのストーリーは、依然としてサイエンスとは遠いところにいるなあとは、感じる。まあ、それは聞き流しておいて、上手に患者さんを説得するという感性をもつようにしようと思っている。かかりつけ医は、関係を長く維持することが大事だ。今回は風邪でも次は癌を疑う症状でやっつけられるかもしれない。

少し前、ウィキリークスが話題になったが、なんとおぞましい、と思った。あんなになんでもかんでも暴露するのが、「知る権利」で片づけられるのか。多方面で、相当迷惑している人がいるんじゃないか。医者というのは、古来、特殊な力を持ち、一種、神のように扱われる立場に置かれてきた。しかし現代になって情報公開が進み、いろいろ暴かれることが増えた。それは、大変良いことだろう。一方で、訴訟が増えるなど余計な誤解や不信、対立も生まれた。まさにパンドラの箱だ。点滴にかこつけているのも大げさだが、世間一般の人が持つ医学観や迷信すらも、ヒステリックに破壊してしまわない、という叡智もあるのではないかと考えるのである。

(小園 亮次)

## 広島県医師会速報 2011年(平成23年)1月5日

- 発行所/社団法人 広島県医師会  
〒733-8540 広島市西区観音本町一丁目1番1号 TEL.082-232-7211 FAX.082-293-3363  
広島県医師会HP <http://www.hiroshima.med.or.jp/> E-mail [kouhou@hiroshima.med.or.jp](mailto:kouhou@hiroshima.med.or.jp)
- 編集者/広島県医師会会長 碓井 静 照
- 印刷所/レタープレス株式会社  
〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809番地の5 TEL.082-844-7500 FAX.082-844-7800